

## はじめに

本報告書は、なにわ大阪研究センターにおける関西大学創立 130 周年記念特別研究費より助成を受けたプロジェクト「なにわ大阪の『笑い』に関する調査と研究」の研究成果である。特別研究期間は 2016 年 4 月から 2018 年 3 月までの 2 年間で、浦和男（人間健康学部、代表）、関屋俊彦（文学部）、森下伸也（人間健康学部）、雨宮俊彦（社会学部）、太田リヨ子（学外研究分担者）のメンバーで取り組んだ。

本研究班は、「なにわ大阪の『笑い』」に関して各研究員が取り組む研究と並行して、個別研究では十分に目を向けることができない領域を中心に講師をお招きし、2016 年度に 5 回、2017 年度に 6 回、合計 11 回の研究会を開催して問題を掘り下げ、ニューズレターは 2017 年 12 月の時点で 8 号まで発行し、研究の進展の広報と情報の発信を行った。ニューズレターに掲載した研究会報告は、本報告書の巻末に再掲する。

「なにわ大阪の『笑い』」（以下、「なにわ大阪」は「大阪」と記す）に関する先行研究は多数ある。研究会を通して、すぐれた先行研究にあっても「大阪の『笑い』」について見落とされていることが多々あることを知ることになり、これだけでも本特別研究は大きな成果を得ることができたと考える。

見落とされた点は、「大阪は本当に『笑い』の聖地か」、「大阪の『笑い』は本当におもしろいのか」、「なぜ大阪は『笑い』の土地となったのか」という三点に集約できる。「大阪は『笑い』の聖地」説の起源は不明であり、この言い回しに問いを投げかけた研究は、残念ながら未見である。初めからこの言い回しありきで、検証もせずに前提とするケースを頻繁に目にする。「笑い」は健康によいはずだが、大阪の平均寿命は国内でも最下位に近く、この点からしても、「大阪は『笑い』の聖地」説には疑問が生じる。

むしろ、大阪文化圏内の人々は、おもしろい、おもしろくない、よりも、「笑う」ことを楽しみ、「笑い」を大切にする傾向が強いと考えることができる。それが「『笑い』の聖地」という発想につながる。そうすると、なぜそのような文化が醸し出されたのか。つまり、「なぜ大阪は『笑い』の土地となったのか」という問いへとつながって行く。

この問いを考える上で、「なにわ大阪の基層文化を考える」をテーマとした研究会では「川」というキーワードが浮上した。鈴鹿千代乃氏（神戸女子大学名誉教授）は遊女の発生と川について、丸山顕徳氏（花園大学名誉教授）は仏教文化の流入と川について論じた。川に沿って興行場が発展するとともに、「笑い」を伴う遊びの文化が京、大和、播州、泉州、河内から流れ込んできたことに注目すべきであることを考えなければならない。筆者の報告では、石川を境に泉州と河内のだんじり地車に差異があるという、だんじり研究者の間で周知の事実が「笑い」にも関係していることを指摘した。石川以東の地車は「にわかだんじり」とも呼ばれ、だんじりに小さな舞台があり、そこでにわかを演じる。今でも、千早赤阪村近辺のだんじりは建水分神社に結集し、にわかを奉納する。他所でもにわかや喜

劇を演じているようである。泉州、河内長野のだんじりは住吉大社系の神社と関わる場合が多いが、石川以東、葛城山、金剛山までのだんじりは、奈良の広瀬大社と関わる神社が多い。広瀬大社系の奈良の多くの神社では、田植え祭であるおんだ祭の際に滑稽な要素を伴う。残念ながら、周辺地域との「笑い」の伝統的交流にも不明点が多い。

「笑い」を楽しむ伝統としては、なにわ大阪には上方落語がある。今でも社会人落語、大学落語は活発で、そのなかでも関西大学文化会落語大学（落大）は大学落語研究会の老舗である。落大は桂米朝、桂枝雀（当時は小米）の指導で活動を始め、桂三枝（現文枝）など多数の落語家を輩出した。その落大の50年を振り返る研究会「関西大学落語大学笑述」では、落大創生期の「落大生」から当時の話をお聞きした。映画、漫才に人気を奪われ、戦後も衰退激しかった上方落語は、桂米朝らの活躍がなければ今日のような落語ブームを見ることはなかった。落語の低迷期にその伝統を支えたのが大学落語研究会であり、その中心は落大であった。「目立ちたい」、「女の子にもてたい」と学生らしい動機で取り組んだ落語であったが、関大生のプライドとして「古典芸能」を守ろうという意識は根底にあっただろうし、大学教員もそのような意識で指導をしたはずだ。そして、「笑う」ことを楽しみ、「笑い」を大切にする大阪文化の血脈が、落語に取り組ませたことはまちがいない。学生寄席に加え、慰問活動あり、落語研究ありの落大は、大阪の「笑い」の文化を継承する一役を担うことになったのである。

大阪人の心情から見た「笑い」については、雨宮俊彦研究員（社会学部教授）が日本トランスパーソナル心理学会大会で、森下伸也研究員（人間健康学部教授）らの参加でワークショップを開催した。『『笑い』の東西』をテーマとした研究会では、日高水穂氏（文学部教授）は漫才のテキストと日常会話を分析し、東西差を明らかにするとともに、ツッコミとボケの変遷を論じた。Till Weingaertner氏（アイルランド、ヨーク大学准教授）は落語の国際化という問題を扱い、大阪の落語の自由さということを指摘した。伝統に固執せず、新しい要素をどんどん採り入れようとする大阪の落語家の落語は、型にはまらないだけに新しいおもしろさを追求している、とすることができそうである。

「大阪の『笑い』はおもしろいか」を考える上で、「演芸放送の『笑い』」の研究会は大変刺激的であった。高垣伸博氏（元毎日放送プロデューサー、追手門学院大学教授、同笑学研究所所長）は「演芸放送」と「放送演芸」の違いを指摘をした。寄席中継など現場の演芸を番組として放送してきた「演芸放送」は、放送局が演芸を時間や予算の枠組みで縛り「放送演芸」となっている。村田元氏（毎日放送プロデューサー）は、より自然に、寄席を見る感覚でテレビ番組が制作できないか、という現場での「ジレンマ」について、制作側の苦労や工夫を説明した。制作現場は、不特定多数の視聴者に向けて「大阪らしい『笑い』」を発信する努力をしていることがよくわかった。

しかし、視聴者側はきびしい。2017年夏に某所で開催された、戦前のSPレコードを聴く研究会で、ある方が「SPレコードで聴く俳優や芸人の大阪弁は少しおかしな部分があるが、今の俳優や芸人は大阪弁ではない。私は『吉本大阪弁』と思っている。」という趣旨

の発言をされた。その後、若者の「笑い」意識を漫才師を通して考える卒業論文に取り組んだゼミ生が、天神橋筋商店街、空堀商店街で約 25 人の高齢者にもインタビュー調査を実施し、高齢者が「お笑い」番組にどのような意識を持っているかを訪ねた。若者と同じように現在の漫才師を応援する方々もわずかにいたが、大半が「今のお笑い番組はおもしろくない。大阪の『笑い』ではない。大阪弁も不自然。」という趣旨で回答をした。一部の方々からは「大阪の『笑い』はもっと自然で、作られた今の『お笑い番組』とは違う。」という指摘もあった。

放送現場も視聴者側も「笑い」に「大阪らしさ」を求める。しかし、その開きはどんどん大きくなっているのかもしれない。「演芸放送」では、大阪出身ではない芸人が大阪の番組に出演するのも一因であろう。言葉では説明できない「大阪らしさ」が心身に染み込んでいないため、作られるままに演技をする。この点は私たちの課題を超えるので指摘するとどめるが、「大阪らしい『笑い』とは何か」を考える上でも重要なポイントとなる。小人数の授業の初回で自己紹介をさせ、受講生を笑わせるように求める。大阪出身の学生は、ほぼ確実に「大阪の人間がおもしろいことを言うと期待したら、あかん」と言う。しかし、相手にはおもしろさを要求し、何かにつけ「その話、どこにオチがあるん？」を仕掛ける。「笑い」の「大阪らしさ」は、話のオチそのものというよりも、会話のキャッチボールを行い、最後にうまくボールを受け止める、ようなコミュニケーションの行為そのものを楽しんで笑うことにあるようにも見られる。

2017 年 12 月に空堀商店街で、大正 3 年の大阪地図を見て昔の大阪の話をしようという企画を本学社会的信頼システム創成センターと共同で開催した。当日は、100 年前の、1 枚の地図からいろいろな話が飛び出し、参加者がお互いに笑い合う。自然の会話の中に「オチ」がついて、その「オチ」が新しい「オチ」へとつながる、「大阪らしい『笑い』」の本来の姿を体感することとなった。

2017 年は近代漫才の父・秋田実氏の没後 40 年の年であった。秋田氏は「笑い」を提供する側として健全な「笑い」の提供を心掛けた。秋田氏の「健全な『笑い』」は、このような「大阪らしい『笑い』」を土台にしていたはずだ。＜大阪の「笑い」＝上方落語、漫才＞と紋切り型に扱わずに、もっと広く、芸能の土台となるべき、大阪に深く根付いてきた「笑い」の本質を探り出すことが今後の課題である。それは、大阪という土地へのオマージュであり、閉塞感の漂う大阪圏をもっと活気のある街にするきっかけともなる。

130 周年記念特別研究「なにわ大阪の『笑い』に関する調査と研究」班に対し多大なる協力をいただいたなにわ大阪研究センターの与謝野有紀元センター長、スタッフの方々、常に助言を与えてくださった井上宏総合情報学部名誉教授、研究会開催にあたってお世話になった方々、研究会に参加し貴重な意見をいただいた方々に、感謝を申し上げたい。

2018 年 2 月 4 日 立春  
浦 和男